

明神滝と消えずの火

昔、田代川の上流に、こうのみという里がありました。広い田畑を耕して人々は豊かな暮らしをしていました。

こうのみに九郎太夫という人が住んでいました。ある日隣村へ商売に出かけました。秋の陽はつるべ落としに暮れるので、早めに切り上げて帰り始めました。九郎太夫が田原山の麓にかかる頃には、未だ大峰山の頂に夕日が残っていましたが、竜石が丘にたどり着くと、もう霜月初めのかすかな星明りだけとなり、くしげのえきの森林に入ると、

「まるで、鼻をつまんでもわからない」

といわれるほどの真っ暗闇になりました。

一歩誤れば千尋の谷底、九郎太夫は木の根や岩角を手探りで歩いていました。

「もう少しくと消えずの火が見える」

と心に言い聞かせて進んでゆきました。やがて。消えずの火が闇に浮かんできました。

「やれやれ、一安心」

と九郎太夫は岩角に腰を下ろし一服しました。

ふと、お爺さんから聞いた話を思い出しました。

むかし、むかし、明神様（宮島の祭神イツキシマ姫）は乳飲み子を抱えて、別れた愛人を慕って、故郷の出雲の国を出られて流浪のたびを始められた。

石州から芸州を経てこの地においでになった。雲出の一軒の民家に、金のちきり（機織の道具の一つ）を預け、明神滝の近くでしばらく滞在されたそう。ちきりを預かった家ではその名にちなんで、ちきりが一ちの屋号で長く続いた。金のちきりを受けとったイツキシマ姫は、山の深い防州路で難儀を重ね、特に苦の坂声は大変な苦しみだったとみえて、必死に持ち歩かれた金のちきりをこの地に留め置き、旅を続けられた。金のちきりを置かれた周防の国には、今も、ちきり明神があるということじゃ。さてこの消えずの火のことじゃが、イツキシマ姫が滞在されたので明神滝と呼ぶようになった。

明神滝の三段に積んだ自然石、二丈（約六メートル）ばかりの石灯籠に神秘的常夜灯がそのとき作られ、消えずの聖火として幾千年も光り輝いているのじゃ。

九郎太夫は暗闇の中、消えずの火を目指して歩き始めました。

「こう暗くては家に帰るは容易なことではない。今夜だけこの消えずの火を借りて帰ろう」

と聖火を借用し、こうのみの自宅に帰りました。

ひとたび人間の手に触れた聖火は、永久に再びと輝きませんでした。

それだけでなく、こうのみの田や畑は、鳥獣虫害しきりに襲い、米、麦をはじめ五穀が実らず、次第に荒れてゆきました。ついには人が住めなくなり、こうのみの里も消えずの火と共になくなりました。

文久元年の記録によると

「往古の荒田方御座候へども家の有無の儀、申し伝えも御座無く……」

とあり、同じ記録に大原、白井田原、すきまさ、熊が杉などに家が有ったと明記してありますから、こうのみがあつたのはかなり古いことのようにです。

又、この地を浄蓮屋敷と呼び、万正寺の前身、万願寺の遠祖はここから出たと伝えています。